

「鬼」と「姫」の接頭語用法について

—— アンケート調査の分析と検討 ——

佐々木 翔太郎

1. はじめに

佐々木 (2010) は、日本語の「鬼」が「鬼のように忙しい」(とても忙しい)「鬼かわいい」(とてもかわいい)など、強意的用法を持つようになったことについて研究している。その内容の一つに、接頭語として「鬼」が異形・巨大(以下『異形・巨大』義)、「姫」が小さい(以下『小さい』義)ことを表すとする国語辞典の記述に着眼し、これに関するアンケート調査を実施したものがある。佐々木 (2010) はアンケート調査の結果を分析し、今日における「鬼」の強意的用法との関連性を指摘している。この調査・分析は古来から残存する「鬼」の意味内容と新たに発生したと考えられる「鬼」の強意的用法の意味的なつながりを確認しており、通時的側面と共時的側面をカバーしている点に大きな特徴があると言える。本稿では、佐々木 (2010) が実施したアンケート調査とその分析を部分的にピックアップして再考し、「鬼」の強意的用法発生について考え方の一つを提案するとともに、佐々木 (2010) の採った手法について今一度検討していきたい。

2. 「鬼」の異形・巨大義と「姫」の「小さい」義

小学館 (2000-2002) 『日本国語大辞典』(以下、『日国』)は、接頭語の「鬼」は「他の名詞の上について、勇猛、無慈悲、異形、巨大などの意を表す」としている。北原 (2002) 『明鏡国語辞典』においても接頭語の「鬼」は「形が大きい。また異形である」と記述されている。

また、『日国』は接頭語の「姫」について「物の名に付けて、それが小さくてやさしい感じのするもの、かわいらしいものであることを表す」と記述している。

「鬼」と「姫」(かわいらしい女性)の両者は、『伊勢物語』の「芥川」やおとぎ話の「一寸法師」のように、「襲う者」「襲われる者」として古くから関係が深いのが、接頭語の「鬼」と「姫」も物の大小を示すものとしての関係性が見られる。

3. 「鬼」の強意的用法と「姫」の弱意的用法

『日国』や『明鏡国語辞典』は接頭語「鬼」は名詞に接続するとしている。しかし、佐々木 (2010) は、米川 (1997) や北原 (2006)、『現代用語の基礎知識』などに見られる接頭語「鬼」の強意的用法は、「鬼うま」(とてもおいしい)「鬼かわ」(とてもかわいい)など、名詞に限らず動詞・イ形容詞・ナ形容詞といった用言にも接続すると指摘している。このように、「鬼」は接頭語としての接続範囲を大幅に拡大させ、さらに意味内容においても「とても」「非常に」といった強調の意味合いを持つようになり、その機能を変容させている。

また、接頭語の「姫」について、佐々木 (2010) は次の新聞記事を引用している。

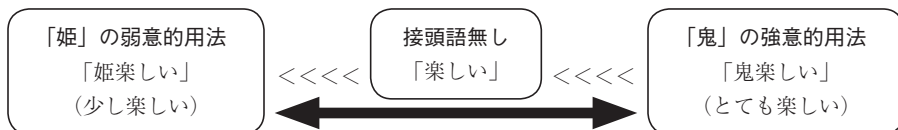
●姫 —プリンセスではないけれど

男性を指す「彦」に対し、女性を表す語。「日女」が語源ともいう。「姫ゆり」「姫小松」のように、物の名に付けて、小さくて愛らしい様子を表す使い方もある。

この接頭語の用法は、現代の若者にも引き継がれている。大修館書店が中高生から新語を募った第3回「もっと明鏡」大賞の受賞作のひとつに「姫系ファッション」「姫電」(かわいくデコレーションした電話)といった今風「姫」が選ばれた。「姫こわ〜」「姫楽しい」「姫たつ」(ちょっと腹が立つ)など、「少し」の意で形容詞や動詞にも付くところが、姫新しい? (2008/12/10付 読売新聞朝刊「日本語日めくり」より)

記事の「物の名に付けて、小さくて愛らしい様子を表す」という記述は『日国』と同様の内容であるが、「『少し』の意で形容詞や動詞にも付く」という説明は『日国』にはない。北原(2009)では副詞的に働く「姫」についてより詳細に記述されている。「少し」「ちょっと」の意味で用いられる接頭語「姫」は『日国』の「姫」の定義から外れている副詞的用法である上に、「恐い」「楽しい」のような語が後接しており、「姫」が持つ女性イメージやかわいらしいイメージが直接関係していない。このような「姫」の機能変容は「鬼うま」「鬼かわ」に見られる接頭語「鬼」の機能変容と非常に類似している。「姫」が用言に接続して「少し」の意味を表し、物事の様子や程度の弱めるこの用法を、「鬼」の強意的用法と対比的に「姫」の弱意的用法と呼ぶことにする。

「鬼」の強意的用法と「姫」の弱意的用法は後接する用言の様子や程度の強弱を示す記号として機能する。次に、「楽しい」を例にしてその関係を示す。



「楽しい」を基軸に、「楽しい」度合いを強調して満足度を高めるなら「鬼楽しい」、「楽しい」度合いをやや弱め、そこそこの楽しさを表すのなら「姫楽しい」となると言える。

4. アンケート調査の目的

物事の様子や動作の程度を弱める「姫」の弱意的用法には、「姫百合」や「姫小松」のように「姫」が「小さい」義を本来持っていることと何らかの関係があるように思われる。この考え方は、「鬼」の強意的用法が「鬼やんま」「鬼あざみ」など「鬼」の異形・巨大義と関連性を持つのではないかとする北原(2009)の見解と類似する。「鬼」「姫」が従来持っている「大きい」「小さい」といった意味合いが副詞的に応用され「とても」「少し」の意味で若者の間で用いられるようになったことを国語辞典をもとに通時的に分析していると考えられる。

本稿では、「鬼」の異形・巨大義や「姫」の「小さい」義を中心とする接頭語「鬼」「姫」に着目し、これらの語に対する認知状況や意味理解の実態をアンケートで調査する。また、アンケートの結果をもとに、「鬼」の強意的用法や「姫」の弱意的用法との関連性を分析する。

5. アンケート調査

佐々木 (2010) は質問紙法によりアンケートを行っている (別添資料参照)。

アンケート調査の有効回答者数は464名で、その内訳は次の通りである。

年齢…10代:123名 20代:107名 30代:69名 40代:79名 50代:57名 60代:17名 70代:12名

性別…男性:209名 女性:255名

階層…中学生:43名 高校生:19名 大学生:157名 社会人:189名

年齢別内訳では10代と20代が100名を超え、30代～50代が約60～80名となっている。性別内訳では男性より女性の方が多く、男女比は9:11で極端な偏りは出ていない。階層別内訳はアンケート調査用紙の「職業欄」を集計したものである。階層別内訳では大学生と社会人が抜き目出て多いが、中高生・大学生をひとまとめにした生徒・学生集団と社会人の分布で見れば、生徒・学生集団が219名、社会人が187名となり、比較的バランスが取れている。その他の欄では「主婦」「フリーター」「専門学生」「農業」「無職」などの記入が見られた。

5-1. 調査対象語について

佐々木 (2010) はアンケートの調査対象語を『日国』から引用し、接頭語「鬼」「姫」に共通の語が後接する次の4組 (計8語) を選定している。『日国』には前述のような例が計18組あるが、回答者の負担過重を避けるために調査対象語は4組に絞られている。

鬼胡桃 (オニグルミ)	姫胡桃 (ヒメグルミ)	鬼鼠 (オニネズミ)	姫鼠 (ヒメネズミ)
鬼皮 (オニカワ)	姫皮 (ヒメカワ)	鬼躑躅 (オニツツジ)	姫躑躅 (ヒメツツジ)

調査対象語の選定にあたり、「鬼」や「姫」によって付与されている様々な語感を尊重し、互いに大小によって対比されている組だけに限定することは避けている。調査対象語の4組には、接頭語「鬼」「姫」によって次の図1のような意味内容の差異が認められる。

	鬼胡桃 (オニグルミ)	堅い 大(20m以上)	殻の堅さ 全長	柔らかい 全体に小さい	姫胡桃 (ヒメグルミ)	
	鬼鼠 (オニネズミ)	大(20~28cm)	体長	小(7~10cm)	姫鼠 (ヒメネズミ)	
	鬼皮 (オニカワ)	厚く堅い	皮の厚さ・堅さ	薄く柔らかい	姫皮 (ヒメカワ)	
	鬼躑躅 (オニツツジ)	赤く、大 有り	花の様子 毒性	ピンク、小 無し	姫躑躅 (ヒメツツジ)	

図1 調査対象語の意味内容

「鬼胡桃」と「姫胡桃」、「鬼鼠」と「姫鼠」は全長および体長の大小、「鬼皮」と「姫皮」は皮の厚さや堅さ、「鬼躑躅」と「姫躑躅」は花の大きさや色、毒性の有無などが対比的に示されていると考えられる。各語の『日国』における詳細な意味記述については、佐々木 (2010)

を参照されたい。「鬼躑躅」「姫躑躅」の毒性の有無については木村（1996）を参照している。木村（1996）ではオニツツジ（見出し語は「レンゲツツジ」）に毒性があることが記述されている。なお、上記の調査対象語の他に、序列調査（後述）において調査対象語を含めた比較用の語として「野胡桃（ノグルミ）」「溝鼠（ドブネズミ）」を採用している。

5-2. 設問の内容

アンケート調査では3種類の調査を実施した。

設問1 認知度調査

調査対象語の認知率を明らかにする。各語について「A. 知っている」「B. 知らない」の項目を設け、どちらかを選んでもらうようにした。

設問2 (1) (2) 序列調査

接頭語は異なるが後接の語は同じである言葉を、調査対象語を含む計3語提示し、接頭語の違いによるニュアンスをどのように把握しているかを序列付けによって調べた。(1)は「鬼胡桃」「姫胡桃」「野胡桃」で樹の全長を、(2)は「鬼鼠」「姫鼠」「溝鼠」で体長を、それぞれ大きい順に左から不等号で示してもらうようにした。

設問2 (3) (4) 説明文選択調査

(3)では「鬼皮」「姫皮」、(4)では「鬼躑躅」「姫躑躅」について、それぞれ対比的な内容で記述された説明文をAとBの2文ずつ提示した。「鬼～」「姫～」のどちらを説明しているものかを回答者に記号で答えてもらうようにした。2つの語に対して2つの説明文を提示しているため錯乱肢は無く、一方が決まればもう一方も決まるという単純な質問である。

本稿では各設問の全体集計、年代別集計の結果を示し、検討を行う。佐々木（2010）では男女別の集計も行っているが、男女の結果に大きな差異が見られないため、本稿では割愛する。なお、年代別集計では60代、70代回答者の集計数が他の年代と比較して少ないため、50代回答者の集計に算入して「50代以上」（86名）として扱う。

6. アンケート調査の結果

6-1. 認知度調査

全調査対象語について回答を求めた。認知度調査では各項目の選択数を集計し、有効回答者数に対する各項目の選択率を算出した。選択率は小数点第1位までを示し、第2位以下は四捨五入している。以下、本章におけるパーセンテージの算出方法はこれに準ずる。

6-1-1. 認知度調査の全体集計

認知度調査の全体集計の結果を次頁の表1に示す。

Aの選択率はいわゆる「認知率」であり、Bの選択率は「非認知率」である。全項目において非認知率が非常に高くなった。ほとんどの回答者が調査対象語を認知していないと言える。特に、②「姫胡桃」③「鬼鼠」では認知率が5%未満となり、極端に低い。①「鬼胡桃」から⑦「鬼躑躅」まで、全て非認知率が80%を上回っている。また、⑧「姫躑躅」の非認知率も

(31)

表1 認知度調査全体集計 (n=464)

項目	A. 知っている		B. 知らない	
	選択数	選択率	選択数	選択率
①鬼胡桃	43	9.3	421	90.7
②姫胡桃	13	2.8	451	97.2
③鬼鼠	19	4.1	445	95.9
④姫鼠	70	15.1	394	84.9
⑤鬼皮	67	14.4	397	85.6
⑥姫皮	54	11.6	410	88.4
⑦鬼躑躅	54	11.6	410	88.4
⑧姫躑躅	97	20.9	367	79.1

79.1%であり、ほぼ80%に達するものである。

⑧「姫躑躅」は、全体集計で唯一、認知率が20%を超えた語である。他の調査対象語と比較して群を抜いて認知率が高いわけではないが、この認知率の高さには特定の世代の認知率が関係していると思われる。

6-1-2. 認知度調査の年代別集計

認知度調査の年代別集計の結果を次の表2に示す。以下、年齢別集計では各年代の人数が異なっているため、選択率のみを表中に示す。設問2の序列調査や説明文選択調査も同様とする。

表2 認知度調査年代別集計

(単位：%)

項目	年代	A. 知っている	B. 知らない	項目	年代	A. 知っている	B. 知らない
①鬼胡桃	10代	7.3	92.7	⑤鬼皮	10代	6.5	93.5
	20代	5.6	94.4		20代	0.0	100.0
	30代	10.1	89.9		30代	10.1	89.9
	40代	10.1	89.9		40代	27.8	72.2
	50代～	15.1	84.9		50代～	34.9	65.1
②姫胡桃	10代	4.1	95.9	⑥姫皮	10代	7.3	92.7
	20代	0.9	99.1		20代	1.9	98.1
	30代	2.9	97.1		30代	5.8	94.2
	40代	1.3	98.7		40代	21.5	78.5
	50代～	4.7	95.3		50代～	25.6	74.4
③鬼鼠	10代	8.1	91.9	⑦鬼躑躅	10代	17.9	82.1
	20代	3.7	96.3		20代	13.1	86.9
	30代	1.4	98.6		30代	5.8	94.2
	40代	3.8	96.2		40代	5.1	94.9
	50代～	1.2	98.8		50代～	11.6	88.4
④姫鼠	10代	16.3	83.7	⑧姫躑躅	10代	20.3	79.7
	20代	15.0	85.0		20代	17.8	82.2
	30代	14.5	85.5		30代	20.3	79.7
	40代	13.9	86.1		40代	17.7	82.3
	50代～	15.1	84.9		50代～	29.1	70.9

①～④で年代によって顕著な差が出ている語は見られない。どの年代においても、これらの語に対する認知は少ないということが分かる。①「鬼胡桃」で認知率が最も高い50代以上(15.1%)が最も低い20代(5.6%)と9.5ポイントの差を付けているが、いずれも認知率は20%を超えていない。

⑤「鬼皮」と⑥「姫皮」では40代と50代以上の認知率が高く、他の年代と大きな差を付けて

いる。特に⑤「鬼皮」の50代以上の認知率は34.9%であり、50代以上の回答者の3分の1以上の認知がある。「鬼皮」と「姫皮」は食物に関する言葉である。栗やたけのこなどを採ったり調理したりするなど、「鬼皮」「姫皮」に触れる機会の多い年代ほど認知率が高くなっていると思われる。

⑧「姫躑躅」は全体集計で最も認知率が高かった語であり、どの年代も認知率が15%以上を超えている。特に、50代以上の認知率は29.1%で最も高く、他の年代と約9～11ポイントの差がある。⑧「姫躑躅」の50代以上の認知率は、⑤「鬼皮」や⑥「姫皮」における50代以上の認知率ほどには他の年代と大きく差を付けてはいないが、ほぼ30%に達するものである。

⑤⑥⑧では、おおよそ年代が上がるにつれて認知率も高くなっていくという傾向が見られるのに対し、⑦「鬼躑躅」では10代と20代のほうが認知率が高くなっている。これは⑤⑥⑧とは逆の傾向である。しかし、どの年代も認知率が20%を上回らず、非認知率が非常に高い。

6-2. 序列調査

序列調査では2つの質問を提示しているが、(1)の「鬼胡桃」「野胡桃」「姫胡桃」を比較する設問にはミスがあったことを佐々木(2010)は振り返っている。

佐々木(2010)によると、アンケート作成後に家永ら(1993)、牧野(1961)などの植物事典を参照したところ、ヒメグルミはオニグルミの変種であることだけが記載されてるだけで、具体的な全長が明記されていなかったことが述べられている。ノグルミは家長ら(1993)、『日国』ともに高さ10mであることが記述されており、オニグルミより小さいことは明らかに出来たが、ヒメグルミの全長が曖昧なために(1)の正答が決まらないままとなっている。幸いにも、「鬼胡桃」「姫胡桃」「野胡桃」の大きさを回答者がどう順序付けるかは回答者の主観に委ねられていたため、この不確実性は影響しなかった。しかし、植物事典等で確実な裏付けを取らず、『日国』の「全体に小さい」という記述だけで「ヒメグルミが最も小さい」と判断した佐々木(2010)は早計であり、これはアンケートの作成の際の不手際と言える。アンケートの設問内容は慎重に検討すべきである。

6-2-1. 序列調査の全体集計

序列調査(1) A「鬼胡桃」、B「姫胡桃」、C「野胡桃」の全体集計を次の表3に示す。

表3 序列調査(1)全体集計 (n=464)

(1) A.鬼胡桃 B.姫胡桃 C.野胡桃		
序列	回答数	回答率
①A>B>C	112	24.1
②A>C>B	267	57.5
③B>A>C	17	3.7
④B>C>A	3	0.6
⑤C>A>B	50	10.8
⑥C>B>A	15	3.2
A>B選択 (①②⑤)	429	92.5

も大きいと指摘している(つまり「A>B」として)回答を合わせたものである。回答パターンは計6通りであるが、A>B選択に該当するのは①「A>B>C」②「A>C>B」⑤「C>A>B」の3つである。

回答率が最も高くなったのは②「A>C>B」でA「鬼胡桃」が最も大きく、B「姫胡桃」が最も小さいとする回答であった。回答率は57.5%で、全体の半数以上の回答者が②を回答していることになる。次に回答率が高いのは①「A>B>C」で24.1%であるが、

最も回答率の高い②「A>C>B」とは30ポイント以上の差がある。3番目に回答率が高いのは⑤「C>A>B」の10.8%で、他の回答は回答率5%を下回っている。A>B選択率は92.5%と非常に高く、ほとんどの回答者が「姫」よりも「鬼」に大きいイメージを持っているということが分かる。

次に、序列調査(2) A「鬼鼠」、B「姫鼠」、C「野鼠」の全体集計を表4に示す。

表4 序列調査(2)全体集計 (n=464)

(2) A.鬼鼠 B.姫鼠 C.溝鼠		
序列	回答数	回答率
①A>B>C	24	5.2
②A>C>B	185	39.9
③B>A>C	9	1.9
④B>C>A	1	0.2
⑤C>A>B	232	50.0
⑥C>B>A	13	2.8
A>B選択 (①②⑤)	441	95.0

『日国』では「溝鼠」は「体長20～25センチメートル」とあり、「20～28センチ」の「鬼鼠」、「7～10センチ」の「姫鼠」の間に位置する大きさであるため、A>C>Bの順が適切と考えられる。「鬼鼠」と「溝鼠」の間の差が計量的にはやや曖昧であるが、『日国』の「鬼鼠」の語積内で「ドブネズミに似ているが、著しく大形」と記述されている。また、『地球動物図鑑』(2006)ではオニネズミは頭から胴までの大きさが36cm以下であるとも示されている。

(2)では②「A>C>B」が適切な序列である。本調査は正答率の高さを明らかにすることを目的としていないが、②「A>C>B」よりも⑤「C>A>B」の回答率が高くなったのは意外な結果であった。⑤「C>A>B」の回答率は50.0%で全体のちょうど半数となり、②「A>C>B」とは約10ポイントの差を付けている。その他の回答は回答率10%にも満たない。②と⑤の回答はA「鬼鼠」とC「溝鼠」の順序が異なるが、B「姫鼠」が最小である点は同じである。B「姫鼠」が最も小さなネズミであるという類推は、回答者の間で非常に高い割合で働いている。なお、A>B選択率は(1)と同様に90%を超え非常に高く、ほとんどの回答者が「姫」よりも「鬼」に大きいイメージを持っているということが分かる。

C「溝鼠」がA「鬼鼠」よりも大きいとする⑤「C>A>B」の回答率が最も高くなったのには、「溝」の語感の悪さや、濁音が続いている発音上の強烈な印象が影響していると考えられる。北原(2009)は、若者の中で使用の見られる接頭表現を掲載している。強意的用法として働いている語の例には「えぐ」「頑固」「激」「ギガンティック」「ぎゃん」等、マイナスイメージを持つ語や、濁音を含み大げさなイメージを持つ語が多数見られる。タレントの中川翔子が自身のブログで使い話題となった「ギザ」や、昨今若者が多用している「ガチ」などがその類であろう。もちろん、「溝鼠」の「溝」は若者語ではないが、前述の例が強意的用法として使われている現状を踏まえると、回答者がネズミの大きさについて考える際に、「溝」に強意的な意味合いを持たせる意識が働き、「鬼」が持つ巨大なイメージを越えてしまったのではないかと考えられる。また、回答者が「溝」が指し示す生活空間からネズミのタフネスさをイメージして、最も大きいものと位置付けたとも考えられる。

6-2-2. 序列調査の年代別集計

次の表5は(1)の年代別集計である。

どの年代においても②「A>C>B」の回答率が最も高い。A「鬼胡桃」を最大、B「姫胡

表5 序列調査(1)年代別集計 (単位：%)

(1) A.鬼胡桃 B.姫胡桃 C.野胡桃					
序列	10代	20代	30代	40代	50代～
①A>B>C	23.6	16.8	21.7	21.5	38.4
②A>C>B	57.7	63.6	65.2	54.4	46.5
③B>A>C	3.3	2.8	5.8	2.5	4.7
④B>C>A	1.6	0.0	0.0	1.3	0.0
⑤C>A>B	12.2	10.3	5.8	15.2	9.3
⑥C>B>A	1.6	6.5	1.4	5.1	1.2
A>B選択 (①②⑤)	93.5	90.7	92.8	91.1	94.2

ている。その分、他の年代では20%前後となっている①「A>B>C」の回答率が38.4%と目立っている。なぜ50代以上で①「A>B>C」の回答率が高くなったのかを特定し難いが、A「鬼胡桃」が最大である点は①も②も同じであり、「鬼」に大きな物を表すイメージを抱いているのは①の回答者も②の回答者も共通している。

A>B選択率は全年代とも90%を上回っている。どの年代においてもA「鬼胡桃」がB「姫胡桃」より大きいとする①②⑤に回答が集中している。

序列調査(2)の年代別集計を次の表6に示す。

表6 序列調査(2)年代別集計 (単位：%)

(2) A.鬼鼠 B.姫鼠 C.溝鼠					
序列	10代	20代	30代	40代	50代～
①A>B>C	8.9	5.6	4.3	1.3	3.5
②A>C>B	39.8	51.4	44.9	29.1	31.4
③B>A>C	4.1	2.8	1.4	0.0	0.0
④B>C>A	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0
⑤C>A>B	44.7	38.3	42.0	65.8	64.0
⑥C>B>A	2.4	1.9	5.8	3.8	1.2
A>B選択 (①②⑤)	93.5	95.3	91.3	96.2	98.8

30代が40%前後の回答率であるのに対して、40代以上は65%前後もの回答率を得ている。②と⑤で回答率の高い年代層が反対であり、比較的若い年代で②の回答率が高く、高い年代で⑤の回答率が高い。

北原(2009)が示しているようなマイナスイメージや濁音の付く若者語があることを考慮すれば、若年層ほどC「溝鼠」をより大きいものにとらえる傾向は強いと思われる。しかし、実際には、C「溝鼠」を最大とする⑤の回答率が高くなったのは40代以上の回答者であった。20～30代では、C「溝鼠」よりA「鬼鼠」が大きいとする②の回答が多くなった。10代は40代以上と同様に⑤の回答率のほうが②より高いが、②の回答率も39.8%とほぼ40%に届く高さである。

「鬼」もまたマイナスイメージを基本概念とする語であるが、濁音のある種々の強意表現よりも大げさな語感があるものとして若い年代の間で受け入れられていると考えられる。

A>B選択率は全年代で90%を上回っている。認知度調査では「鬼鼠」にも「姫鼠」にもほ

桃」を最小とする回答者が世代を問わず多いと言える。逆に、B「姫鼠」が最大、A「鬼鼠」が最小となる④「B>C>A」の回答率は非常に低く、特に20代、30代、50代以上は0%で誰一人回答していない。

50代以上のみ②「A>C>B」の回答率が50%を下回っ

(2)の年代別集計では②「A>C>B」と⑤「C>A>B」においてそれぞれ年代による差が見られる。②「A>C>B」では10代～30代で40～50%の回答率が得られたのに対し、40代以上は30%前後の回答率となっている。一方、⑤「C>A>B」では10代～

とんど認知率が無いことが明らかになったが、「鬼」が付くものは大きく、「姫」が付くものは小さくなるという類推がどの年代においても無意識に働いていると考えられる。

6-3. 説明文選択調査

設問2の(3)では「鬼皮」「姫皮」、(4)では「鬼躑躅」「姫躑躅」の説明文を提示している。説明文は、佐々木(2010)が引用・参照した『日国』の記述やwebのコメント・画像をもとに作成されている。選択肢A・Bの内容が対照的で、互いの特徴が明瞭になるよう配慮している。

(3)では「鬼皮」をB、「姫皮」をAとする回答が正しく、(4)では「鬼躑躅」をA、「姫躑躅」をBとする回答が正しい。以下、記述を簡潔にするために、回答を「A-B」または「B-A」で示す。例えば(3)の場合、「A-B」は「鬼皮」をA、「姫皮」をBとしている回答、「B-A」は逆に「鬼皮」をB、「姫皮」をAとしている回答であることをそれぞれ示す。

6-3-1. 説明文選択調査の全体集計

説明文選択調査の全体集計を示す。次の表7は(3)「鬼皮」「姫皮」の全体集計である。

表7 説明文選択調査(3)全体集計(n=464)

鬼皮 - 姫皮	回答数	回答率
A - B	30	6.5
B - A	434	93.5

B-Aの回答率は93.5%で、正答に回答が大きく偏る結果となった。Aは柔らかい皮を表し、Bは堅い皮を表している。「鬼」が「堅い」という意味を、「姫」が「柔らかい」という意味

を直接持っているわけではないが、それぞれ「皮」と結びつくことによって皮の堅さの強弱を指し示す記号として働いている。「鬼」の容姿から想像されるごつごつとして強さのある男性イメージは厚く堅い皮を比喩的に表していると考えられる。一方、「姫」の持つ弱々しくも優しい女性イメージは、皮を剥ぎ取るのに力の要らない薄く柔らかな様子を表していると考えられる。「鬼皮」も「姫皮」も回答者の認知率は低く、調査対象語の意味もほとんど知られていないと思われる。しかしながら、意味説明を提示すれば適切に答えられる回答者が多いという(3)の結果は、「鬼」と「姫」のイメージから類推して「鬼皮」「姫皮」の意味を推測できる回答者が93.5%いるという事実の表れである。

次に、(4)「鬼躑躅」「姫躑躅」の全体集計を表8に示す。

表8 説明文選択調査(4)全体集計(n=464)

鬼躑躅 - 姫躑躅	回答数	回答率
A - B	422	90.9
B - A	42	9.1

(4)でも回答が一方に大きく偏り、正答のA-Bが90.9%の回答率を得ている。Aは「蓮華」が指し示す赤色や「大きな花」が「鬼」の容姿や性質のイメージと関連する。また、「毒性が

強い」という記述にはマイナスイメージがあり、「姫」よりも「鬼」と結びつきやすい内容であろう。Bでは「小さい」や「ピンク色」といった記述が「姫」と関連している。北原(2009)は「ピンクや白といった柔らかい色づかい」を「姫」が指示するとしているが、「姫」からイメージされる色と言えば、まずピンク色であるとの連想が働く。「鬼」と「姫」のイメージをもと

にして答えるには十分な内容の説明文であったと言えよう。

6-3-2. 説明文選択調査の年代別集計

説明文選択調査の年代別集計を示す。次の表9は(3)「鬼皮」「姫皮」の年代別集計、表10は(4)「鬼躑躅」「姫躑躅」の年代別集計である。

表9 説明文選択調査(3)年代別集計 (単位: %)

鬼皮 - 姫皮	10代	20代	30代	40代	50代~
A - B	5.7	6.5	7.2	7.6	5.8
B - A	94.3	93.5	92.8	92.4	94.2

表7、8からうかがえるように、説明文選択調査ではどちらの問いにおいても顕著な年代差は見られない。「鬼」と「姫」によって生じる意義差をどの世代も感じ取っていると言える。一方が決まれば他方も決まるという形式の質問なので、回答率

表10 説明文選択調査(4)年代別集計 (単位: %)

鬼躑躅 - 姫躑躅	10代	20代	30代	40代	50代~
A - B	91.1	90.7	88.4	89.9	94.2
B - A	8.9	9.3	11.6	10.1	5.8

も非常に高くなったのであろう。錯乱肢としての説明文をもう一つ追加し、A~Cの3つの選択肢から一つを回答するという質問形式にしていたならば、回答率にも変化があり、年代差も生じていたかも知れない。

7. まとめと考察

佐々木(2010)のアンケート調査は、回収する以前からある程度結果に予想の立つ調査であった。認知度調査は全体的に低い認知率となるが、それにも拘わらず序列調査や説明文選択調査ではふさわしい回答へ回答率が偏るだろうと予測されたものである。すなわち「言葉を深く知らなくても、相対的な位置付けは分かる」という実態を予想し、何らかの形として結果に示すことを目的として実施されたアンケート調査であると言えよう。

序列調査の(2)A「鬼鼠」B「姫鼠」C「溝鼠」でA「鬼鼠」よりもC「溝鼠」のほうが大きいとするC>A>Bの回答率が最も高くなったことは予想に反していたが、その他の調査ではほぼ予想通りの結果となっている。

アンケート調査の結果は、調査対象語に対する既有知識(スキーマ)が無くても、「鬼」が付くと相対的に大きいもので、「姫」が付くと相対的に小さいものであるという類推作用が人々の間で働いていることのと表れであると言える。「鬼」の強意的用法発生への北原(2009)の見解は、「鬼」の異形・巨大義の応用であるとする通時的なとらえ方であると言えるが、これについて佐々木(2010)は「『鬼』の異形・巨大義を現代人が無意識に拡張しているという共時的なとらえ方で検討する必要もある」と指摘している。国語辞典に掲載されているいわゆる「古い言葉」に対する認知率が低い結果を踏まえた上で、佐々木(2010)は人々が今現在「鬼」に対してどのようなイメージを抱き、言語表現に応用しているかという観点も重視している。

現代人の「鬼」に対する感覚について、佐々木(2010)はマインドマッピングを用いた調査や「鬼」の直喩表現による文章完成法調査を用いて分析している。これらの調査の結果は、次のようにまとめることができる。

- ①人々は「鬼」に対して「怖い」「醜い」というマイナスイメージだけでなく、「大きい」「強い」というプラスイメージも持っている。 【マインドマッピング調査】
- ②人々は「鬼」のプラスイメージを使って、「鬼のように働く」「鬼のように忙しい」「鬼かわいい」といった比喻をするようになってきている。その際、「鬼」の容姿や振る舞いといった視覚的イメージは捨象され、ことばとしての勢い（いわゆる、語気）のみを利用している。 【文章完成法調査】

佐々木（2010）は、接頭語「鬼」の強意的用法の発生は、接頭語「鬼」の異形・巨大義がもととなっていることは間違いないと指摘している。しかし、上記のような「鬼」のイメージの変貌、言葉としての在り方の変化を遂げて、若者の自由な発想によって今日のような用法が成立していることを報告している。

本アンケート調査において接頭語「姫」が並行して分析されているのは、「姫」の弱意的用法成立が「鬼」の強意的用法成立と非常に類似しているのではないかという予想があったためである。「姫」から感じられるかわいらしいイメージ、弱々しいイメージ、さりげないイメージを利用して、あたかもラベルを貼るように言葉に付け添えてニュアンスを表していると考えられる。小松（2006）は『「鬼」とは記号である』と述べている。また、小松（2006）は「鬼監督」「鬼刑事」「鬼百合」「鬼やんま」などは、「大きい」「形が醜悪な」「毒性をもっている」など、鬼の属性の一部を想起したことから命名されたものであり、鬼概念を応用したものだとして指摘している。「鬼」は古くから人々のイメージを託されてきた語であるが、今日においては、特に若者の間で、彼らの自由な発想によってその大きく強いイメージが強意的用法に使用されるようになったのである。ただし、「姫」は「鬼」と異なり実在性があるため、視覚的イメージの捨象は「鬼」のようにはいかないだろう。「鬼」と同様、マインドマッピング調査や文章完成法調査を実施し、その実態を分析すると明らかになる事項があるかも知れない。

8. おわりに

本稿は佐々木（2010）の研究内容の一部を再考する形で進められた。検討箇所の伝えている事は非常に単純なことであるが、それを数値化し、証拠として提示した事に価値がある。ただし、さらなる検討・修正の余地が見られる点もある。佐々木（2010）が「通時的側面」としているのは辞典類の分析だけであるが、当時の出典やそれに関連する参考文献にまで遡り、より詳細な研究も必要である。また、アンケート調査の調査数を増やし、年代、階層等のバランスを整える必要もある。

「鬼」の研究は尽きる場所がない。しかし、「鬼」の機能変容の仕組みを突き詰めていくことは、いわゆる「感覚」から生まれていく今日における数ある新語の成立の実態を紐解くヒントとなる可能性がある。

【参考文献】

家永善文・岡村はた・橋本光政・平畑政幸・藤本義昭・前田米太郎・室井緯（1993）『新訂図

解植物観察事典』 地人書館

北原保雄編 (2002) 『明鏡国語辞典』 大修館書店

北原保雄監修 (2006) 「もっと明鏡」 委員会編 『みんなで国語辞典！これも、日本語』 大修館書店

北原保雄編著 (2009) 「もっと明鏡」 委員会編集 『みんなで国語辞典②あふれる新語』 大修館書店

木村陽二郎監修 (1996) 『花と樹の大事典』 柏書房

小松和彦 (2006) 『妖怪文化入門』 せりか書房

佐々木翔太郎 (2010) 「『鬼』における強意的用法の発生について」 現代日本語文化研究会発行・山口大学人文学部林伸一研究室編 『現代日本語文化論』 第2号 pp.1-69

小学館 (2000-2002) 『日本国語大辞典 (第二版)』

牧野富太郎 (1961) 『牧野新日本植物図鑑』 北隆館

山極寿一監修 (2006) 『地球動物図鑑』 新樹社

米川明彦 (1997) 『若者ことば辞典』 東京堂出版

(ささき・しょうたろう)

(別添資料)

ことばに関するアンケート

① 以下の①～⑧の語を、あなたが「知っている」場合はAに、「知らない」場合はBに○を付けてください。

① 鬼胡桃 (オニグルミ)	A. 知っている	B. 知らない
② 姫胡桃 (ヒメグルミ)	A. 知っている	B. 知らない
③ 鬼鼠 (オニネズミ)	A. 知っている	B. 知らない
④ 姫鼠 (ヒメネズミ)	A. 知っている	B. 知らない
⑤ 鬼皮 (オニカワ)	A. 知っている	B. 知らない
⑥ 姫皮 (ヒメカワ)	A. 知っている	B. 知らない
⑦ 鬼躑躅 (オニツツジ)	A. 知っている	B. 知らない
⑧ 姫躑躅 (ヒメツツジ)	A. 知っている	B. 知らない

② 次の (1)～(4) の質問についてそれぞれ答えてください。

(1) 次の3つのクルミ科の植物を、あなたが全長が大きいと思う順に左から並べて記号で答えてください。

A. 鬼胡桃 (オニグルミ) B. 姫胡桃 (ヒメグルミ) C. 野胡桃 (ノグルミ)

大 (> >) 小

(2) 次の3つのネズミ科の動物を、あなたが体長が大きいと思う順に左から並べて記号で答えてください。

A. 鬼鼠 (オニネズミ) B. 姫鼠 (ヒメネズミ) C. 溝鼠 (ドブネズミ)

大 (> >) 小

(3) 次のAとBは「鬼皮」(オニカワ)または「姫皮」(ヒメカワ)について説明したものです。各語の説明として適切と思う方をそれぞれ選び、() 内に記号を記入してください。

A. たけのこの穂先に近い部分の柔らかい皮のこと

B. 栗などの木の実の外側の厚く堅い皮のこと

「鬼皮」() 「姫躑躅」()

(4) 次のAとBはツツジ科の「鬼躑躅」(オニツツジ)または「姫躑躅」(ヒメツツジ)について説明したものです。各語の説明として適切と思う方を選び、() 内に記号を記入してください。

A. 蓮華躑躅 (レンゲツツジ) の異名。大きな花を咲かせるが、毒性が強い。

B. 小さい躑躅。紫がかったピンク色の花を咲かせる。

「鬼躑躅」() 「姫皮」()

③ 以下の (1)～(3) の該当する項目に○を付け、(4) は括弧内にご記入願います。

(1) 年齢 [10代・20代・30代・40代・50代・60代・70代・80代以上]

(2) 性別 [男・女]

(3) 職業 [中学生・高校生・大学生・社会人・その他 ()]

(4) 出身 [] 都道府県 ※日本国外の方は国名をご記入願います

ご協力ありがとうございました 山口大学大学院人文科学研究科 佐々木 翔太郎